

福島城・十三湊遺跡 1991年度調査概報

— 特定研究「北部日本における文化交流」中世班活動報告 —

千田 嘉博 小島 道裕
宇野 隆夫 前川 要

1 調査の目的と経過

青森県北津軽郡市浦村に所在する福島城と十三湊は共によく知られた遺跡であり、それが「北部日本における文化交流」というテーマの調査対象としてふさわしいことは特に説明を要しないかと思われるが、調査の目的と経過をはじめにまとめておきたい。

福島城 まず福島城は、東北地方北部の最大の城館遺跡として知られ、1955年には東京大学東洋文化研究所によって部分的な発掘を含む調査が行われている（江上波夫・関野雄・櫻井清彦編著『館址』、1958年、東京大学東洋文化研究所）。そこで明らかにされた主な特徴をまとめれば、次のようになる。

- ・湖に面した台地上に立地し、一辺約1 kmの三角形、625,000m²という規模を持つ。
- ・この台地を切り離すための、堀を含んだ幅12~13m・高さ3~4 mという壮大な土塁を持つ。
- ・内部に、一辺200m弱の土塁と堀を持った方形の区画がある。
- ・外郭の土塁には門跡があり、古代城柵に類似した柵列が存在した。
- ・城域内には多数の竪穴住居址および井戸跡があり、遺物から住居址の年代は平安時代後期ころと推定される。

およそ以上であるが、遺跡の位置づけとしては、「東北地方・北海道に特有な館・チャンの一種型」とし、また年代についても、安倍氏・安藤氏の城という所伝に従って、南北朝~室町ころのものとしてされている。

しかし、中世城館の実態が明らかにされてきた今日から見ると、こうした特徴を持つこの遺跡は、中世城館としてはあまりに異質である。この遺跡が安藤氏の城跡であるとされているのも、この地に勢力を持った安藤氏の存在から類推されているにすぎないと思われ、実態としては中世の安藤氏の城というよりも、むしろ古代城柵との類似性が目立つ。文献上では勿論この地方に古代城柵的な存在は示されていないため、もしそうであるとすれば当然その性格が問題となるし、またもしそれが所伝のように中世安藤氏の城館であるとすれば、中世城館の概念自体が再検討を迫られることになり、この遺跡がその中でどう位置づけられるのかが明らかにされなければならない。いずれにしても、いったん予断を排し、遺跡そのものとしてその実態を明らかにする必要

があると言わざるをえないのである。

そしてまた、そのことは、福島城の付近に存在する唐川城、墳館、山王坊などの城館遺跡・中世遺跡の位置づけとも当然密接に関わり、またさらに広く、東北北部や北海道で近年急速に進みつつある浪岡城、勝山館などの発掘調査とも合わせての城館遺跡の地域的特質や変遷などの問題とも関連した形で、様々な側面からの研究に寄与し得るものと思われる。

十三湊 一方十三湊は、室町期のもたとされる『廻船式目』にも「三津七湊」の一つとして見えるなど、中世における有力な港として著名であり、特に北方と関係した日本海交易の最も重要な港であったことは論を待たない。現地でも輸入陶磁器などの遺物が大量に採集され、またこれまでに行われた道路建設などに伴う発掘調査で遺構の存在も確認されている。しかし、都市遺跡としての全体的な把握はこれまで行われておらず、その都市としての構造や町割り、そして変遷などは未解明のままである。また安藤氏などのこの地方の政治勢力がこの港と密接な関係を持っていたことは疑いなく、十三湊の実態と歴史の解明は、こうした存在や福島城をはじめとする付近の遺跡群の研究にも有力な手がかりとなるはずであり、それはまた日本海交易と北方との交流の歴史を総合的に明らかにしていく上で重要な材料を提供するものとなるはずである。

以上が、本特定研究の調査対象の一つとして福島城と十三湊を選んだ主な理由である。実現を見る上では、地元市浦村・市浦村教育委員会の御好意と御協力があつたことが大きな要素であつたことは銘記しておきたい。

調査計画 具体的な調査計画としては、まず第1年度(1991年度)は遺跡の全体像を把握するために福島城の1/1,000実測図を作製し、また福島城・十三湊の詳細分布調査などを行った。第2年度(1992年度)は十三湊の実測図作製と両遺跡の試掘調査、そして第3年度(1993年度)にはこれらの調査をもとにさらに発掘調査を行うことで所期の目的を達したいと考えている。

正規の調査報告はこれらの調査が終了した後に行う予定であるが、やや間隔が空きすぎることもあり、遺跡の概要把握を目的とした初年度の事業についてその記録と成果を概報の形で提出することとした。

日程および参加者 今年度の分布調査の日程および参加者は以下の通りである。

・詳細分布調査

1991年10月11日(金)～10月17日(木)

・調査参加者

千田嘉博・小島道裕(国立歴史民俗博物館)

宇野隆夫・前川 要(富山大学・国立歴史民俗博物館共同研究員)

佐藤智雄(函館市教育委員会・国立歴史民俗博物館共同研究員)

高橋浩二・鈴木和子・宮沢京子・河合君近・浜木さおり・角田隆志・片岡英子・小野木学・

榊原滋高(富山大学人文学部考古学研究室学生)

なお、今回の調査に際しては下記の各位より多大のご協力を賜った。記して謝意を表したい（敬称略）。

市浦村教育委員会、市浦村、市浦村歴史民俗資料館、青森県教育委員会、青森県埋蔵文化財センター、弘前市立図書館、鍋田 元、豊島勝蔵、白川隆治、村山食堂。

2 地図・絵図の調査

(1) 地籍図

福島城および十三湊の地籍図の所在を調査したが、村役場が近年火災に遭っていることもあり、古い時期のものは発見することができなかった。ただ、福島城については、大正12年（1923）の「相内村大字相内字実取二八七番ノ老号 分割地形図」というものがあり、一応一筆一筆を描いているが、福島城の内郭部分付近は広大な一筆となっており、この部分が比較的早くからまとまった形で扱われていたらしいことが窺えた程度であった。

(2) 空中写真

空中写真では、福島城・十三湊とも、米軍撮影のもの（共に1955年撮影）が鮮明で縮尺も大きく、利用価値が高いことがわかった。詳しい読取りは改めて行いたいだが、福島城では、現在では植林が進んで上空からは判別しにくくなっている土塁や堀をはっきり認めることができ、また『館址』所収実測図に見えている、東側外郭土塁の内側にある一辺60m程度の方形の区画も、四周の溝をはっきり確認することができる。

また十三湊のものでは後の植林で隠れた部分や道路建設で消失した部分も含めて一筆一筆の地割を鮮明に読取ることができ、この点では古い地籍図の欠を補うことができた。

(3) 絵図（津軽家旧蔵「十三絵図」について）

十三湊付近を描いた前近代の絵図は何点かがあるようだが、『青森県史』第一巻（1926年）に写真が掲載されている「十三絵図（天和三年）」が最も正確で詳細なものと思われる。『青森県史』によれば「津軽伯爵家蔵」となっているため、津軽家文書を所蔵している弘前市立図書館で原本の所在を調べたが、少なくとも現在の目録にはなく、発見することができなかった。津軽家文書の一部は国立資料館にも所蔵されているが、同館の目録にも該当するものは見当らず、結局現在の所原本は所在不明とせざるをえなかった。従ってこの絵図は『青森県史』所収の写真からしか利用することができず、やむをえず写真からトレースしたのが図1である。写真が小さい上に必ずしも鮮明でないため、文字には判読しがたいところがあり、あえて読んだ部分に誤りもあるかもしれないことは了解されたい。

絵図の左下に記された表題には「天和三年（1683）……」の記載があり、何の年代かは断定し難いが、一応この絵図が描かれた年代であり、その時点での景観を示した絵図と考えてよいと思われる。ただ、写真の感じでは薄い料紙に描かれているようであり、それ自体は後世の写である



写真1 福島城跡
(1992年3月撮影)

可能性もある。

地形の描写は、北部に見える山などは大胆に圧縮されて遠景図ふうになっているが、十三の部分は縮尺・地形ともかなり正確で、特に集落付近は現在の地形ともよく合致する。集落は基本的には現在の位置と変わらず、半島状に突き出した西岸の部分を通る道沿いに街村状に形成されている。現在の前潟・内湖・明神沼はまだ十三湖および海とつながっており、絵図では「川」と記されている。(現在も現地では「せばと川」の呼称がある。) さらに南の「浜明神」(湊神社) 付近からこの水路を通り、船が停泊する場所に集落が形成されたものと見てよいであろう。

しかしこの集落は中世に存在した港町をそのまま踏襲したものではなく、それが一旦廃絶した後新たに形成されたものではないかと考えられる。(後述する分布調査でも、14・15世紀と17世紀以降の間に遺物の断絶があることが判明している。)特に注意されるのは、絵図に見える湊迎寺の北に、二ヶ所の隙間を持った太い線が描かれていることで、これはおそらく、現在も存在す

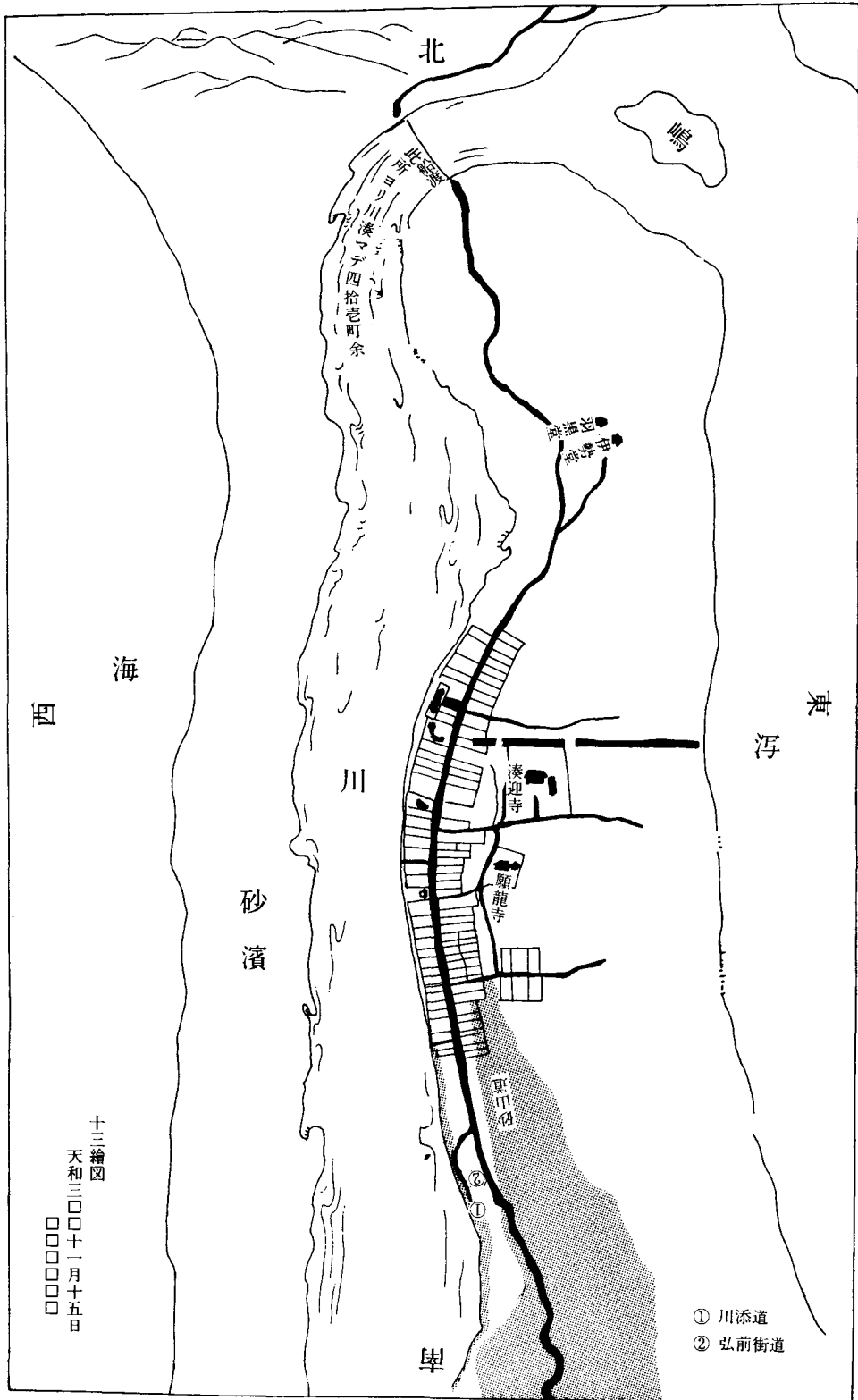


図1 十三繪図（『青森県史』所収写真より）

る土塁状の高まりを描いたものと思われる。二ヶ所の隙間は、あるいは道路の通る出入口であったかもしれない。この「土塁」が港町十三においてどのような機能を持っていたのかは今後の調査の課題だが、いずれにしても現在の、そして絵図に見える集落とは方向が異なり、切り合う関係になっていることから、この集落の形成とは時期差のある存在であることは間違いない。集落より後に築かれたとは考えにくく、やはり中世の十三湊における何らかの施設であったと考えるべきであろう。(なお、豊島勝蔵氏の御教示によれば、この「土塁」の上には網を干してはいけないとされていた、とのことである。)

絵図に描かれている二つの寺院は現在も存在する湊迎寺と願龍寺だが、湊迎寺の位置は現在よりも北にずれている。同寺は近世初期の建立とされるが、絵図では「土塁」の方位とも合致することから、この旧位置は中世の地割りを踏襲しているとも考えられる。

集落の北には、やや離れた位置に二つの建物がある。注記は「伊勢堂」「羽黒堂」と読み、現在の神明宮に相当すると思われる。位置は現在よりも北にあるように見えるが、全体に半島の北端付近は現状よりも大きく描かれており、そのためであるかもしれない。また半島先端部は、海へ通じる水戸口の変化などで実際に形状が変化したものと思われる。

絵図の南部に目を移すと、街道は現状とはかなり異なり、西岸の浜沿いを通る道と、その東の、絵図にも着色(?)で示されている微高地上を通っていたと思われる「砂山道」がある。半島の東側へ抜ける現在の道と異なることは明らかで、さらに南には十三湊と深く関わるとと思われる壇林寺遺跡や浜明神もあることから、注意を要する問題であろう。

*成稿後、豊島勝蔵氏より、函館市立図書館に慶安年間(1648~52)の十三の絵図が所蔵されていることを御教示いただいた。ここで紹介した天和絵図の原本ないしより古い写本と考えられ、また記述もより詳細で資料価値が高いと思われるため、次の機会に改めて紹介を行うこととした。
(小島)

3 福島城の測量調査

(1) 測量図の作成

福島城は東京大学東洋文化研究所による調査以来、広くその存在を知られた城郭遺跡である。しかしその後は継続的な発掘調査は行われず、また東洋文化研究所の調査知見が、本格的に検討されることもなかった。このため福島城は基礎的情報が不足したまま安藤氏の伝承と結びつけられてきた。今回の調査ではこうした通説的解釈と離れ、遺跡の実態を主に考古学的手法によって明らかにすることが、第1に必要であると考えられた。

城館遺跡の成り立ちをその前史から廃絶、さらにはその後の改変をふくめて立体的に明らかにするには、発掘調査が有効であることはいままでもない。しかし城館跡調査では発掘調査の前に、地表面から観察される遺跡の全体像を的確に把握しておくことが大切である。

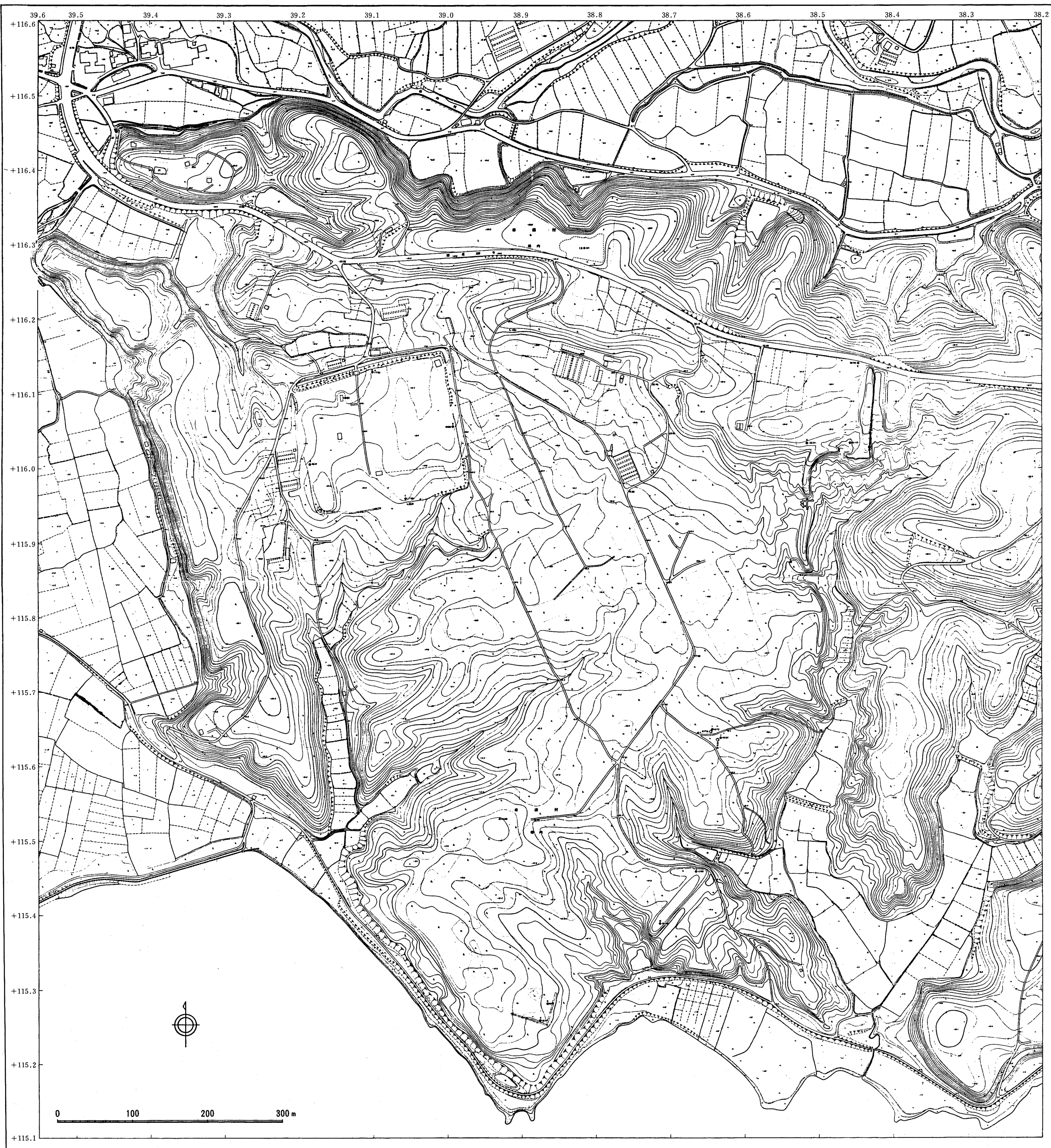


图2 青森県福島城跡現況平面図

表1 福島城跡測量図特記仕用書(抜粋)

(1) 航空写真撮影

撮影はカラー撮影とし、航空写真測量上、支障のない画質が保持できる天候条件のもとで実施するものとする。

尚、撮影の諸元は以下の通りとする。

- ・縮尺 1/8,000
- ・撮影高度 対地高度1,200m
- ・撮影コース数 1コース
- ・撮影予定枚数 6枚
- ・使用カメラ ウイルド社製 RC-10及びRC-20 (f=150mm)と同等以上の機器とする。

(2) 対空標識設置(17点)

対空標識は航空写真上に明瞭に投影される様、周辺の遮蔽物には留意の上、以下の通り設置するものとする。

- ・国家三角点 4点
- ・図根点(発掘用基準点) 13点

図根点は遺跡発掘上、明瞭かつ、基準となる点について博物館職員と協議の上設置するものとする。

(3) 簡易水準測量(6km)

(4) 空中三角測量(5モデル)

(5) 図化

図化は航空測量図化機(ステレオプロッターA-8以上の性能を有する機器)によるものとし、計測原図は整理の上、伸縮のないポリエステルシートに製図し仕上げるものとする。

尚、図化の諸元は以下の通りとする。

- ・図化面積は、1.23km²とする。
- ・図化縮尺は、1/1,000とする。但し、等高線間隔は、主曲線1m、補助曲線0.5mとして描画するものとする。

福島城の測量図には先の東洋文化研究所の調査時につくられたものがあり、今日にいたるまで唯一の全体図面として広く流布してきた。この測量図は遺跡の要点をつかんでおり高く評価される。外郭内に存在する方形の溝罫み遺構などはこのときの指摘がなければ、雑木林化や畑化の進行した今日では知ることが困難であったであろう。しかし緯度・経度情報がないこと、細部の遺構や地形表現が正確でなく等高線間隔があらわいこと、測量後の土地利用が大きく変貌していることなど、調査の基本図面として使用することは不可能であった。

そこで調査の最初に、福島城跡の詳細測量図を作成することにした。測量図の作成に当たっては縮尺を1/1,000とし、等高線は50cmコンターとした。微細な遺構表現が必要な箇所には補助線を入れ、それでも表現できないものはケバ表記を使用した。全体は空中写真測量をベースとし、土塁や堀など作図の眼目となる部分については、平板測量の成果や過去の空中写真の解析結果を

取り入れて補足した。また将来行われる発掘調査のため内郭に4点、外郭壘線際に9点基準点を設置した。その他主要な仕様は別記のとおりである(表1)。

福島城の構造については正報告で詳細に述べることにしたいが、ここでは測量図完成段階で判明したことについて記しておきたい。内郭は旧測量図では東西がやや長い整った方形に描かれているが、実際は地形の制約を受けて北西部分が歪んでいる。土壘頂部間で内郭の大きさは、東西210m、南北185mである。曲輪内部はフラットな印象を受けるが、南西端部が18.9mを最高所に北西部の17.5mまで、1.4mの比高差がある。これ以外にも内郭内には微細な地形の凹凸が認められ、旧状をなんらかの形で反映している可能性が考えられる。

内郭の四周には旧測量図では北辺と南辺に土壘とともに堀が巡っているようすが窺われるが、現況では西辺土壘は郭外の畑による浸食のためほぼ全壊し、南辺もわずかに土壘痕跡は認められるものの、堀はほとんど埋没している。東辺部も土壘の保存状況はよくなく、本来堀があったと思われる部分にまで幅広の土壘状地形が形成されるなど、近年の改変が推測される。本来の虎口に相当するような土壘開口部は見あたらない。

外郭の内部は旧測量図の段階では、広大な草原であったが、現況はブッシュと畑が交錯しており、地表面からの観察はかなり困難である。オセドウ貝塚の東につらなる尾根上に記された堀状の地形は、踏査の結果畑化に伴う溝や切通し道の跡と判断され、城郭遺構ではないことが判明した。

(2) 周辺城館の踏査

福島城、十三湊遺跡と関連すると思われる城館遺跡、墳館、唐川城、柴崎城、尻八館の踏査を実施した。

墳館 よんどて 市浦村磯松古館の比高10m程度の丘陵先端に立地する。墳館は古館よんどてとも呼ばれ、墳は古の転化だとされる。墳館周辺は平地に向かって張り出した尾根がいくつも伸び、墳館も地元では3つの派生尾根上にまたがった城域とされてきた。しかし南端の尾根には地表面から観察される遺構はない。中央の尾根には熊野宮が鎮座しており、積極的に城館遺構とすべきものはない。北端の尾根上には東西約100m、南北約50mの方形に堀が巡らされた削平地が存在する。これが墳館の本体であろう。

堀は現況で上幅4m程度で、かなりの部分が埋没していると思われる。北側の堀の外側には低い土壘が認められる。南側は自然の傾斜転換線まで堀が迫るが、北側は堀の外側に帯曲輪状の余地が残されている。堀跡は畑として利用されている。耕作者より堀北側部分で瀬戸物ふうの水差しの完形品が出土したことがあるとの情報を得た。曲輪内は細かく区分された畑となっており、特に虎口などの機能を特定できる部分はない。

墳館の築造年代を決定する資料はないが、中世の館跡である可能性と、近年東北北部であいついで発見されている10世紀後半～11世紀にかけての防御集落であった可能性の両面から追求すべ

きであろう。

唐川城 市浦村相内岩井の標高160mの山上に立地する。人為的な削平地はほとんど認められないが、南北500m以上にわたって幅4～5mの堀跡が観察される。西側斜面は天然の断崖となるため堀は東側斜面を囲画する。山頂周辺は東西方向の堀から分岐した堀によって尾根筋前後を遮断される。中心部として特に厳重に守られていたことがわかる。所々に堅穴住居跡と思われる円形の落ち込みが認められる。地表面観察からは堀のみで構成されたように見える特異なプランである。

柴崎城 小泊村間柴鼻の標高60mの山上に立地する。西側は断崖でそのまま日本海に落ち込む。1987年開通の林道で一部遺構が破壊されたが、概ねよく遺存している。遺構の中心は神明宮背後の尾根上にあり、きわめて荒い削平の主郭が認められる。主郭南端には低い土塁があり、堀切りを見下ろす。堀切りは谷筋にそって東側にまわり込み、尾根全体を防御する。未熟な曲輪とは対照的な大規模な堀遺構である。林道を隔てた北東尾根上にも、ほぼ自然地形のままの曲輪と尾根筋を断ち切るシャープな堀切りが存在する。堀が城郭の主体となる特徴的な構成と評価できる。

尻八館 青森市後潟後潟山の標高189mの山上に立地する。1977～79年に発掘調査が実施され、多彩な遺物が出土したことで有名な城跡である（尻八館調査委員会『尻八館調査報告書』1981年）。尻八館も曲輪の削平が未熟であるにもかかわらず、堀が多様に発達していたことが確認されている。こうした城郭構成は唐川城、柴崎城などと同一系譜に属するものと考えられる。これは他地域と比べたとき、著しい特徴と指摘することができる。15世紀後半代の改修とされる尻八館プランの考古学的な年代観と合わせ、平安時代末期から戦国期に至る東北北部の城館の展開をさぐる上で、きわめて重要な手がかりといえるだろう。（千田）

4 十三湊・福島城の分布調査

（1）調査の方法

従来、十三湊に関連する遺跡には、琴湖岳遺跡、壇林寺遺跡、鉄砲台遺跡などが設定されているが、これらは個別の遺跡ではなく、全体を包括する形で「十三湊遺跡」という都市遺跡として認識する必要性から、国土座標軸 $X=110.5$ 、 $Y=-42.5$ を原点にして、遺跡全体に50m方眼を設定し、北東コーナーの座標が地区名となるよう設定した。

それら全地区を、1991年10月11日から同17日まで、詳細分布調査して遺物を表面採集した。

（2）採集遺物

今回の調査で採集できた遺物は大きく、中世遺物と近世遺物に分類され、中世遺物はさらに、土師器・瓦器・国産陶器・輸入陶磁器に分類される。これらの組成比は、表2に示すとおりであ

表2 十三湊の種類・器種別食器組成
(1991年度分布調査分, 14~15世紀主体)

種類	器種	破片数	口縁个体数
土師器	皿	7	0.1 (100%)
	小計	7	0.1 (1.6%)
瓦器	(香炉)	2	0.2 (100%)
	(火舎)	2	*
	小計	4	0.2 (3.2%)

国産陶器			
珠洲	壺	49	0.1 (7.1%)
	甕	69	0.2 (14.3%)
	すり鉢	108	1.0 (71.4%)
	碗	1	0.1 (7.1%)
	小計	227	1.4 (93.3%)
越前	壺	6	*
	甕	27	0.1 (100%)
	すり鉢	3	*
	小計	36	0.1 (6.7%)
常滑	壺	2	*
	甕	10	*
	小計	12	*
備前	壺	2	*
	小計	2	*
国産陶器小計		277	1.5 (24.2%)

国産施釉陶	碗	73	1.0 (62.5%)
	天目碗	8	0.1 (6.3%)
	皿	11	0.3 (18.8%)
	おろし皿	3	*
	盤	7	0.1 (6.3%)
	壺	9	*
	(香炉)	3	0.1 (6.3%)
	小計	114	1.6 (25.8%)

高麗青磁	碗か壺	1	*
	小計	1	*

中国製青磁	碗	117	1.8 (94.7%)
	皿	1	*
	盤	3	0.1 (5.3%)
	壺	1	*
	小計	122	1.9 (67.9%)
中国製白磁	碗	38	0.9 (100%)
	皿	1	*
	小計	39	0.9 (32.1%)
中国製陶器	天目碗	1	*
	褐釉壺	2	*
	小計	3	*
中国製陶磁器	小計	164	2.8 (45.2%)
総計		567破片	6.2个体分

り、口縁部計測法によると、土師器1.6%、瓦器3.2%、国産陶器(無釉)24.2%、国産陶器(施釉)25.8%、輸入陶磁器45.2%で、総計567破片6.2个体分であった(以下の%表示は、すべて口縁部計測法による、表2)。近世遺物は、大きく瓦器と国産陶磁器に分類される。

a 中世遺物

土師器 皿が7片あり、年代の判明するものとしては、15世紀末のもの(写真2-7)と14・15世紀のもの(写真2-8)があげられる。

瓦器 香炉(写真2-1)と火舎(写真2-2)があげられる。いずれも、15世紀代のものである。

国産陶器 国産無釉陶器としては、珠洲・越前・常滑・備前があり、国産施釉陶器としては、瀬戸がある。

[珠洲] 壺(写真4-16, 17, 19)・甕(写真4-18, 20)・すり鉢(写真4-1~13, 写真6-6, 7)・碗(写真4-14, 15)が挙げられる。それぞれ、7.1%、14.3%、71.4%、7.1%を占める。

[越前] 壺・甕(写真2-3, 4)・すり鉢が挙げられる。

[常滑] 壺・甕(写真2-5, 6)が挙げられる。

[備前] 壺が挙げられる。

[瀬戸] 碗(灰釉平碗)(写真5-1, 2)・天目碗・皿(縁釉小皿)(写真5-3~6)・おろし皿(写真5-7, 11)・盤(写真5-8, 10, 12, 13)・壺(写真5-14)・香炉(写真5-9)が挙げられる。それぞれ、62.5%、6.3%、18.8%、* (以下、口縁部は存在しないが破片数として存在する場合使用する。)、6.3%、*、6.3%、を占める。

輸入陶磁器

〔高麗青磁〕高麗象嵌青磁の椀か壺が1点ある。

〔中国製青磁〕椀(写真3-1, 2, 4, 6, 7)・皿(写真3-5)・盤・壺が挙げられる。それぞれ, 94.7%, *, 5.3%, *, を占める。

〔中国製白磁〕椀(写真3-8~11)・皿が挙げられる。それぞれ, 100%, *, を占める。

〔中国製陶器〕青磁・白磁以外のものとしては, 天目椀・褐釉壺が挙げられる。

b 近世遺物

近世遺物は, 瓦器と国産陶磁器に分類できる(表3)。

表3 十三湊の種類・器種別食器組成(1991年度分布調査, 18~19世紀主体)

種類	器種	破片数	口縁個体数	種類	器種	破片数	口縁個体数	
瓦器	(火鉢)	1	*		壺	9	0.2 (25.0%)	
	(風炉)	1	*		甕	1	0.1 (12.5%)	
	(瓦)	1	*		鍋	7	0.2 (25.0%)	
	小計	3	*		(香炉)	1	0.1 (12.5%)	
-----					小計	35	0.8 (4.5%)	
国産陶磁器				越前	壺	1	*	
唐津	椀	13	*		甕	20	*	
	鉢	5	0.1 (50.0%)		小計	21	*	
	壺	6	0.1 (50.0%)	唐津系陶器	椀	3	*	
	すり鉢	1	*		鉢	2	*	
	小計	25	0.2 (1.1%)		壺	8	0.1 (100%)	
伊万里	椀	334	5.5 (90.2%)		すり鉢	2	*	
	皿	35	0.4 (6.6%)		小計	15	0.1 (0.6%)	
	(紅皿)	1	0.1 (1.6%)	なまこ釉陶器	椀	8	0.1 (50.0%)	
	蓋	1	0.1 (1.6%)		皿	1	*	
	壺	7	*		盤	3	*	
		小計	378	6.1 (34.5%)		壺	18	0.1 (50.0%)
京焼	椀	1	*		すり鉢	2	*	
	小計	1	*		小計	32	0.2 (1.1%)	
瀬戸・美濃	椀	3	*	産地不明陶器	椀	10	0.1 (1.1%)	
	天目椀	1	*		鉢	2	*	
	志野椀	1	*		壺	30	0.6 (6.7%)	
	小計	5	*		甕	7	*	
備前	椀	1	*		すり鉢	32	0.4 (4.5%)	
	皿	1	0.1 (50.0%)		(火鉢)	4	0.1 (1.1%)	
	壺	6	0.1 (50.0%)		(陶鉢)	27	7.7 (86.5%)	
	甕	1	*		小計	112	8.9 (50.3%)	
	すり鉢	2	*	産地不明磁器	椀	46	0.8 (80.0%)	
	小計	11	0.2 (1.1%)		鉢	3	0.1 (10.0%)	
			盤		2	0.1 (10.0%)		
堺	すり鉢	3	0.2 (100%)		小計	51	1.0 (5.6%)	
	小計	3	0.2 (1.1%)	国産陶磁器	小計	689	17.7 (100%)	
信楽	椀	15	0.1 (12.5%)					
	皿	1	*					
	鉢	1	0.1 (12.5%)	総計		692破片	17.7個体分	

表4 十三溪の用途別食器組成
(1991年度分布調査分, 14~15世紀主体)

用途		破片数	口縁個体数
食膳具	土師器	7	0.1 (2.2%)
	国産陶器	1	0.1 (2.2%)
	国産施釉陶器	99	1.5 (33.3%)
	中国製陶磁器	161	2.8 (62.2%)
	小計	268	4.5 (76.3%)
貯蔵具	国産陶器	165	0.4 (100%)
	国産施釉陶器	9	*
	中国製陶磁器	3	*
	小計	177	0.4 (6.8%)
調理具	国産陶器	111	1.0 (100%)
	国産施釉陶器	3	*
	小計	114	1.0 (16.9%)
総計		559破片	5.9個体分

瓦器 火鉢・風炉(写真9-1)・瓦が挙げられる。

国産陶磁器 唐津・伊万里・京焼・瀬戸美濃・備前・堺・信楽・越前・唐津系陶器・なまこ釉陶器・産地不明陶器・産地不明磁器が挙げられる。

[唐津] 椀(写真6-1~5)・鉢・壺・すり鉢が挙げられる。それぞれ, *, 50.0%, 50.0%, *, を占める。

[伊万里焼] (写真7) 椀・皿・紅皿・蓋・壺が挙げられる。それぞれ, 90.2%, 6.6%, 1.6%, 1.6%, *, を占める。

[京焼] 椀が挙げられる。

[瀬戸美濃] 椀・天目椀・志野椀が挙げられる。

[備前] 椀・皿・壺・甕・すり鉢が挙げられる。

[堺] (写真9-2, 3) すり鉢が挙げられる。

[信楽] 椀・皿・鉢・壺・甕・鍋・香炉が挙げられる。それぞれ, 12.5%, *, 12.5%, 25.0%, 12.5%, 25.0%, 12.5%を占める。

[越前] 壺・甕が挙げられる。

[唐津系陶器] 椀・鉢・壺・すり鉢が挙げられる。

表5 十三溪の用途別食器組成
(1991年度分布調査分, 18~19世紀主体)

用途		破片数	口縁個体数
食膳具	唐津	18	0.1 (1.3%)
	伊万里	369	5.9 (78.7%)
	京焼	1	*
	瀬戸・美濃	5	*
	備前	2	0.1 (1.3%)
	信楽	17	0.2 (2.7%)
	唐津系陶器	17	0.1 (1.3%)
	産地不明陶器	12	0.1 (1.3%)
	産地不明磁器	51	1.0 (13.3%)
	小計	492	7.5 (78.1%)
	貯蔵具	唐津	6
伊万里		7	*
備前		7	0.1 (7.7%)
信楽		10	0.3 (23.1%)
越前		21	*
唐津系陶器		28	0.2 (15.4%)
産地不明陶器		37	0.6 (46.2%)
小計	114	1.3 (13.5%)	
調理具	唐津	1	*
	備前	2	*
	湊焼	3	0.2 (33.3%)
	唐津系陶器	4	*
	産地不明陶器	32	0.4 (66.7%)
小計	42	0.6 (6.3%)	
煮炊具	信楽	7	0.2 (100%)
小計	7	0.2 (2.1%)	
その他	陶鐘	27	7.7
総計		655破片	9.6個体分

〔なまこ釉陶器〕 椀・皿・盤・壺・すり鉢が挙げられる。

〔産地不明陶器〕 椀・鉢・壺・甕・すり鉢・火鉢・陶錘が挙げられる。それぞれ、1.1%、*、6.7%、*、4.5%、1.1%、86.5%を占める。

〔産地不明磁器〕 椀・鉢・盤が挙げられる。それぞれ、80.0%、10.0%、10.0%を占める。

次に、中世（14～15世紀主体）と近世（18～19世紀主体）の食器組成を（表4・5）を参考にしながら見る。中世では、食膳具・貯蔵具・調理具が、それぞれ、76.3%、6.8%、16.9%を占め、近世になると、それに、煮炊具が加わり、78.1%、13.5%、6.3%、2.1%を占める。

（3） 遺物の散布状況

次に、時期が判明するものの時期別での遺物の散布状態を破片数で見たい。

12・13世紀（図3） 神明神社北側の地点で3点、海岸沿いで2点ある。その内、中国製陶磁器白磁椀の底部（写真2—11）、珠洲甕の口縁（写真3—16）が重要である。

14世紀（図4） 12・13世紀と比較すると、神社東側を中心にさらに広がり、土塁北側までに及んでいる。南は、中世以来存在すると考えられる南北道路沿いの湊迎寺付近でも4点ある。

15世紀（図5） 14世紀と比較すると、土塁の南北で明確に分布の集中地点が分離して、南北道路沿い東西に広がり、さらに海岸沿いも濃密になることが挙げられる。

中世（図6） 大半の遺物は、時期不明のものであり、次にそれら全体を見る。分布としては、北は神社の北約500mの海岸に始まり、南は壇林寺の南400mの地点にまで伸びる。分布の中心は、大きく三つあり、神社周辺、海岸沿い、南北道路沿いである。

近世（図7） 近世の遺物の分布は、面的な広がりとしては、ほぼ中世と重なるが、量的には、海岸沿いよりもむしろ南北道路より西側に分布の中心が移る。（前川）

（4） 小 結

分布調査においては、地形・地質に留意しつつ、遺物採集地点の記録と採集遺物の時期別計量とを行うならば、遺跡の有無の確認だけではなく、遺跡の実態にも一定程度に迫る情報を得ることが出来る。今回、十三湊・福島城についての、詳細分布調査を実施した結果、従来の成果に、いくつかの知見を加えることが出来た。

十三湊においては、多数の中・近世遺物を採集した。注意した諸点は、以下の通りである（表6参照）。

- ① 採集資料の年代は少量の縄紋土器を除くと、12世紀中頃～末以後に属する。
- ② 中世資料は、中国製陶磁器、瀬戸、珠洲が中心であり、当然、漆器・鉄鍋も豊富に存在したであろう。常滑・越前・京都系土師器も少量存在する。また珍品と

表6 遺物年代別個体数（十三湊遺跡で年代を判定できた資料）
（1991年度分布調査分）

	破片数	口縁部
12世紀	1	0.1
13世紀	4	0
14世紀	19	0.7
15世紀	21	0.7
16世紀	0	0

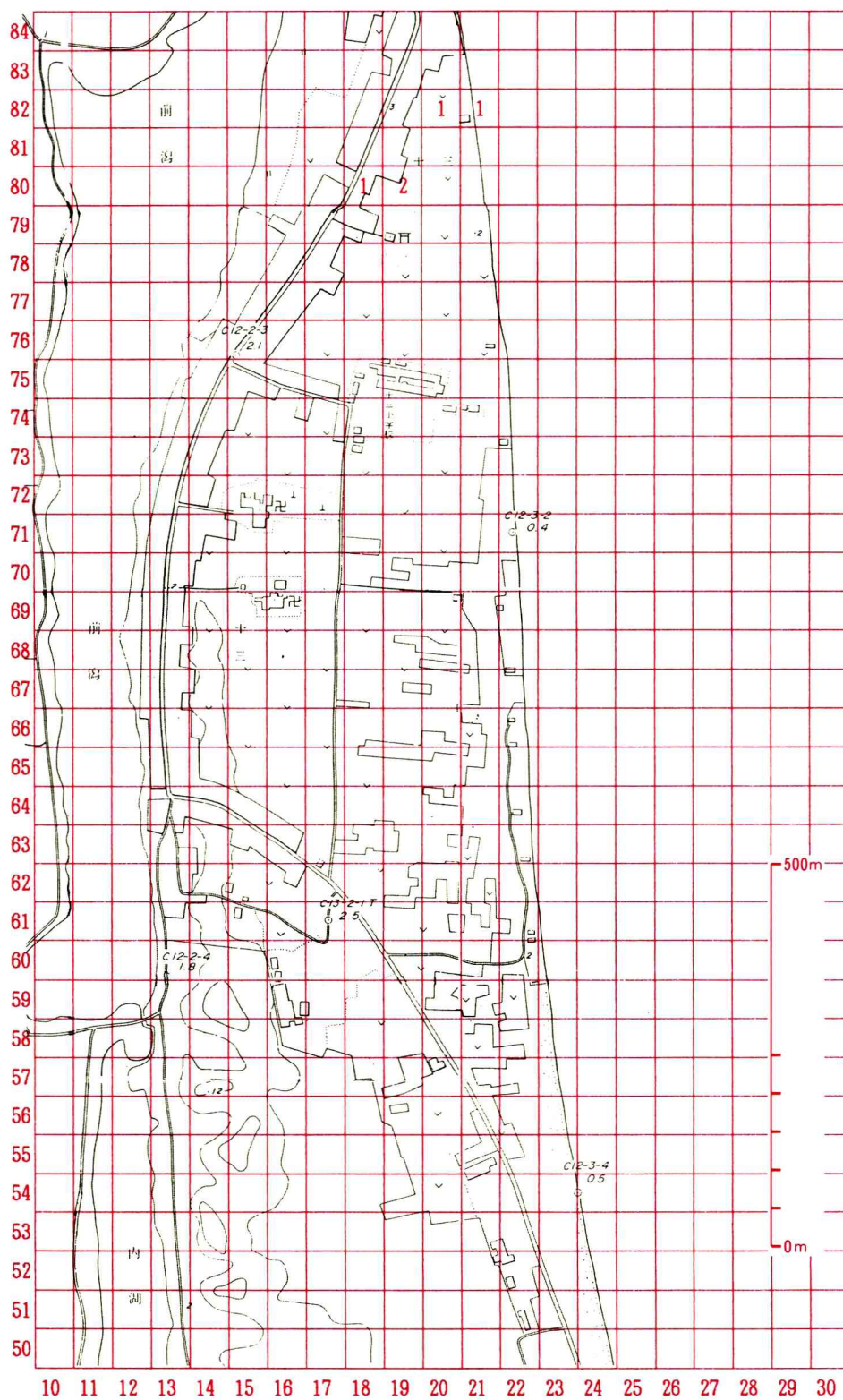


図3 時期別遺物分布図(1) 12・13世紀(数字は破片数) [青森県発行市浦村森林基本図を使用]

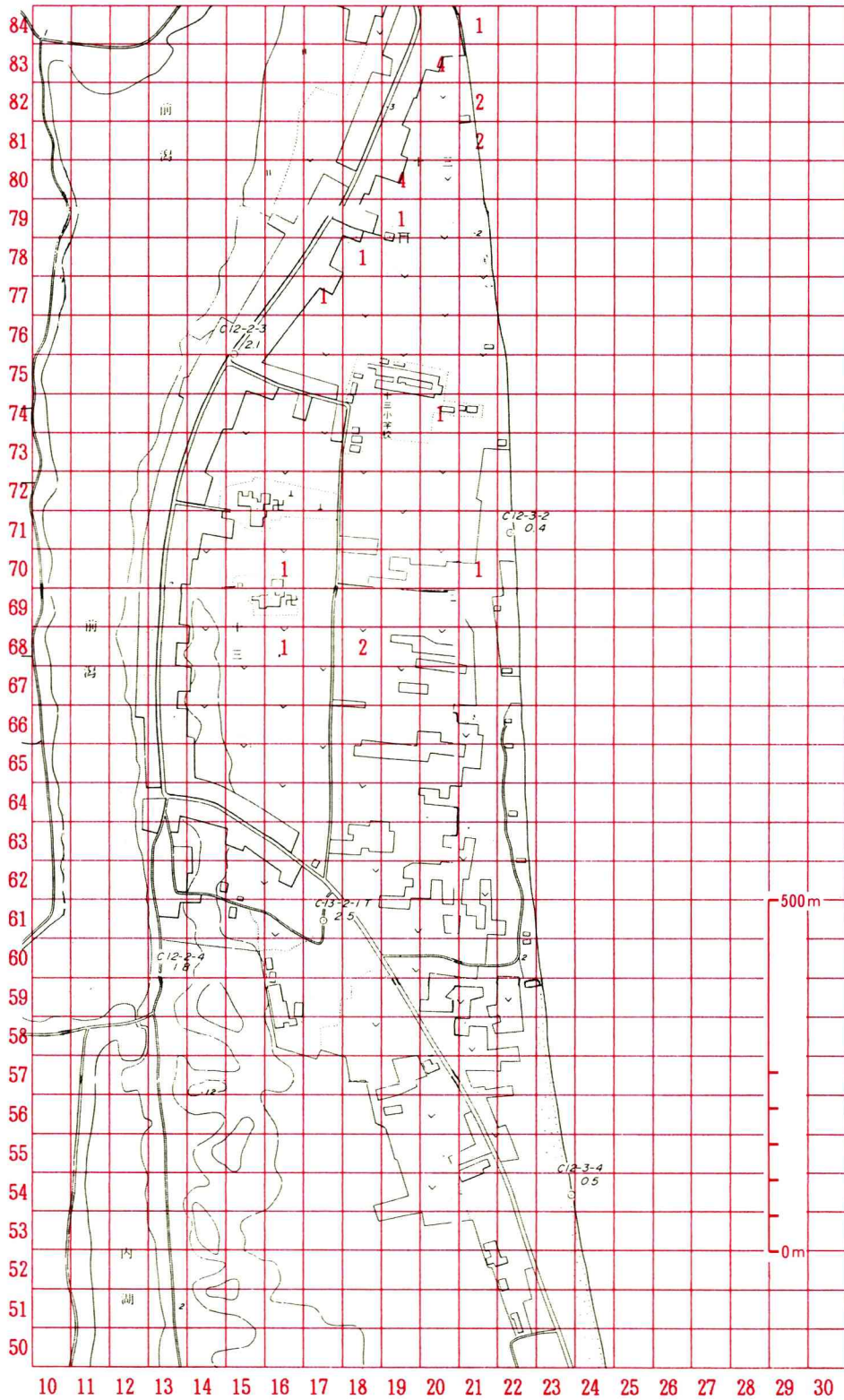


図4 時期別遺物分布図(2) 14世紀

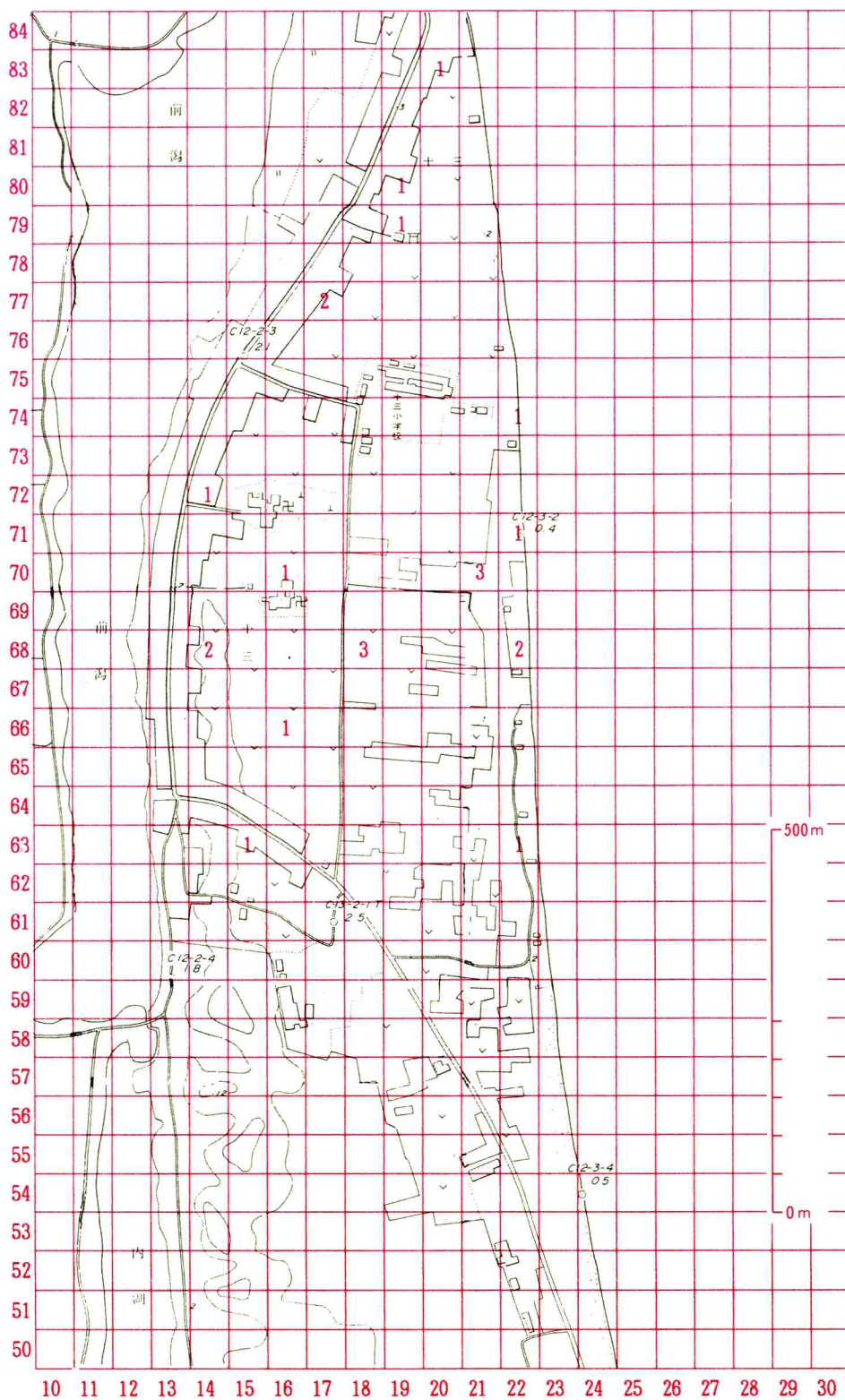


図5 時期別遺物分布図(3) 15世紀

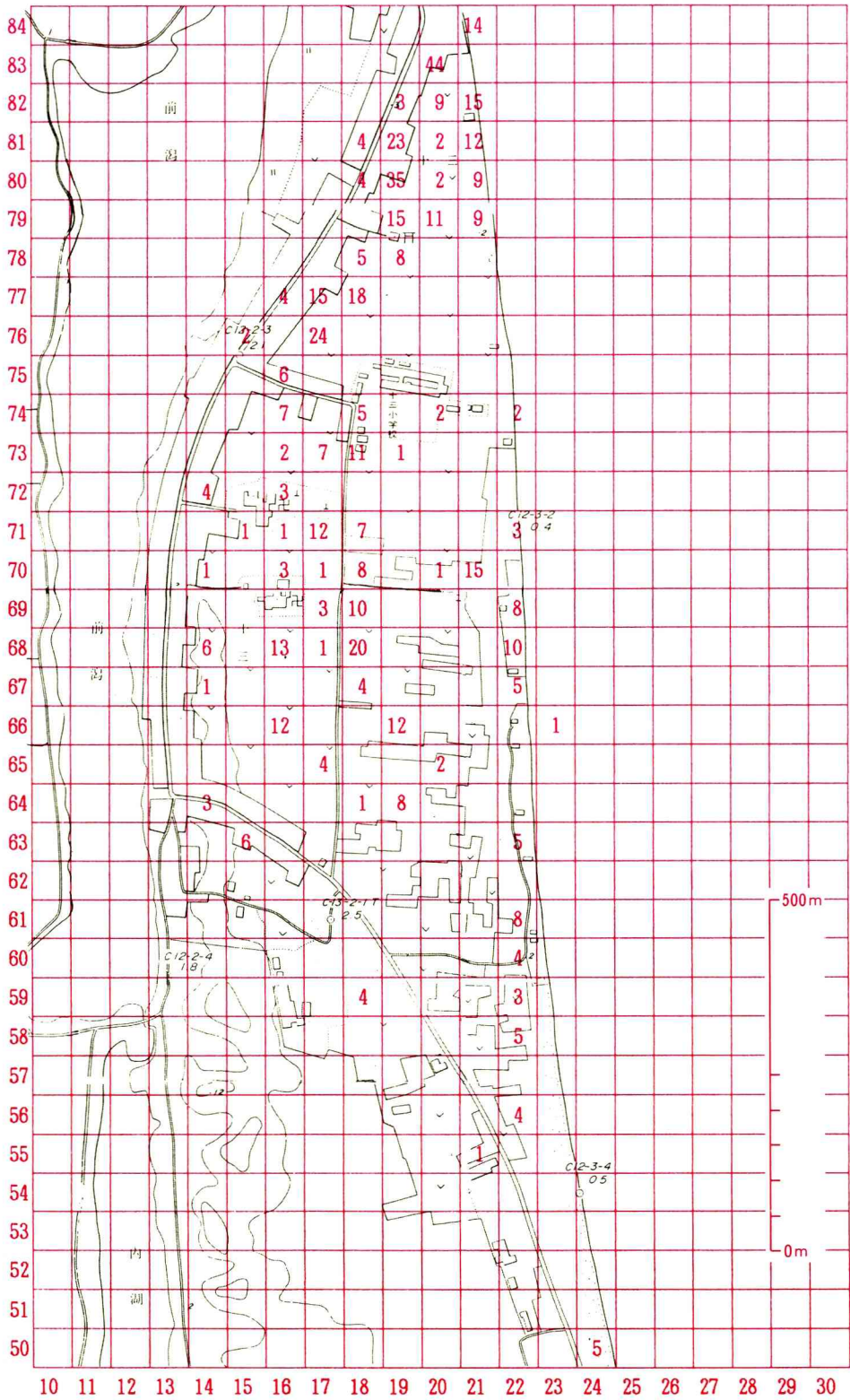


図6 時期別遺物分布図(4)中世全体

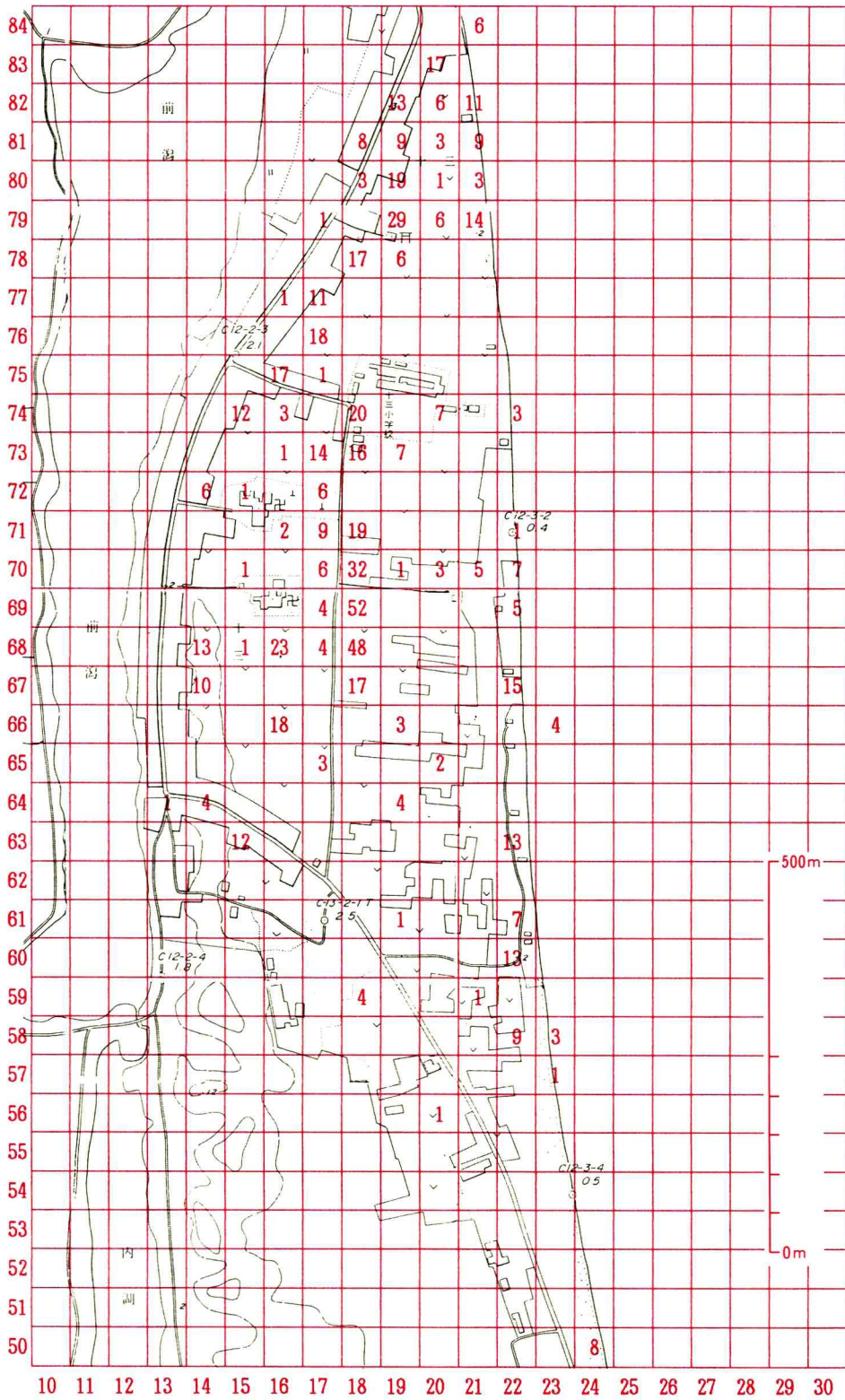


図7 時期別遺物分布図(5) 近世全体

しては、高麗象嵌青磁と中国製天目碗がある。なお近世資料には漁具を含むが、中世資料ではこれを確認できない。

- ③ 採集資料の量は14世紀中頃～15世紀に急増する。
- ④ 遺物は12・13世紀には土塁北側を中心として散布し、14・15世紀では土塁南側に広まるとともに、散布量も土塁南側の方が多くなる。
- ⑤ 中世と近世の資料の年代は連続しない。中世で最も新しい資料は15世紀末に属し、16世紀が空白となる。
- ⑥ 近世資料の散布域は、中世資料全体の散布域と重なるとともに、より広く、近・現代の集落の範囲を含んでいる。また散布量は、中世よりはるかに多い。資料は、唐津・伊万里・界湊焼・京焼系等の遠隔地の製品のほか、唐津写しあるいはなまこ釉等の東北在地窯産と推定できるものが多い。
- ⑦ 近世資料は近世後期に散布量が増大し、近代に連続する。

以上の沿革は、奥州平泉や道南勝山館との関係を含めて、東北における物資集散の中心地機能を果たしたであろう十三湊の盛衰を考察する大きな手掛かりになるであろう。

福島城の「内郭」については、十三湊とは異なり、現状が遺物採集に最も適した畑地であるにもかかわらず、1点の遺物も採集することが出来なかった。これは小規模な山城では、しばしば経験することであるが、大規模な中世城郭としては異例のことに属するであろう。このことの解釈としては、①遺構が深く埋れている、②本施設が非常時のためのものであり日常的には使用されなかった、③使用期間が極く短かった、④遺跡の年代観に問題がある、等が可能であろう。これらの点は発掘調査によって確められるであろうが、従来の調査の知見や、福島城が中世城郭としては異例の構造をもつ点などから見て、④の可能性も考慮しておきたい。その場合、東北北部において、漆器・鉄鍋が普及する反面、中国製陶磁器の使用はまだ本格化しない10・11世紀が候補となるであろう。いずれにせよ、十三湊が港町として機能した時期を通じての安藤氏の本拠としての福島城の位置づけについては、再考の余地があらう。

以上の諸点は、次年度以後の調査によって、さらに検討し、遺跡の理解に役立てていく予定である。(宇野・前川)

5 まとめと展望

今年度の調査は、福島城跡、十三湊遺跡について基礎的資料を充実させ、今後の本格的調査の方向を探ることを目的に実施された。小規模、短期間の調査ではあったが市浦村教育委員会をはじめとする関係各位のご協力によって、ほぼ当初の目的を達成できた。福島城については、遺跡測量図を完成させることができた。今後の研究の基本図面となると思われる。また詳細分布調査では福島城の内郭部分からはまったく中世遺物が検出できなかった。この壮大な城郭遺跡を理解

する上で、今後なにより築造時期を明らかにすることが重要であるといえよう。

十三湊遺跡では、予想をはるかに越える表採遺物を得ることができた。それらを出土位置と年代を軸に合わせて図化することで、遺跡の消長や時期別の範囲を推測することが実現した。また絵図と現地踏査の成果から、中世に遡る可能性がきわめて高い土塁があり、それが今日なお現存することも確認できた。この土塁によって中世十三湊は南北に2分されていたと考えられる。両地区には機能の違いがあったのであろう。

こうした成果をふまえ、来年度は福島城については内郭の土塁、堀を中心に築造年代と構造を探る発掘調査を計画する。十三湊遺跡については福島城に引きつづき、遺跡の基本図面を作成し、そして土塁の北側地区、土塁、土塁南地区の3地点の発掘調査を実現したい。これによって十三湊遺跡の遺存状態、年代、層序などの基本状況を把握するとともに、土塁を挟んだ南北地区の機能差や土塁の内外関係、築造法といった都市空間構成に迫る成果を挙げたいと考えている。関係各位のさらなるご教導をお願いしたい。

(千田)

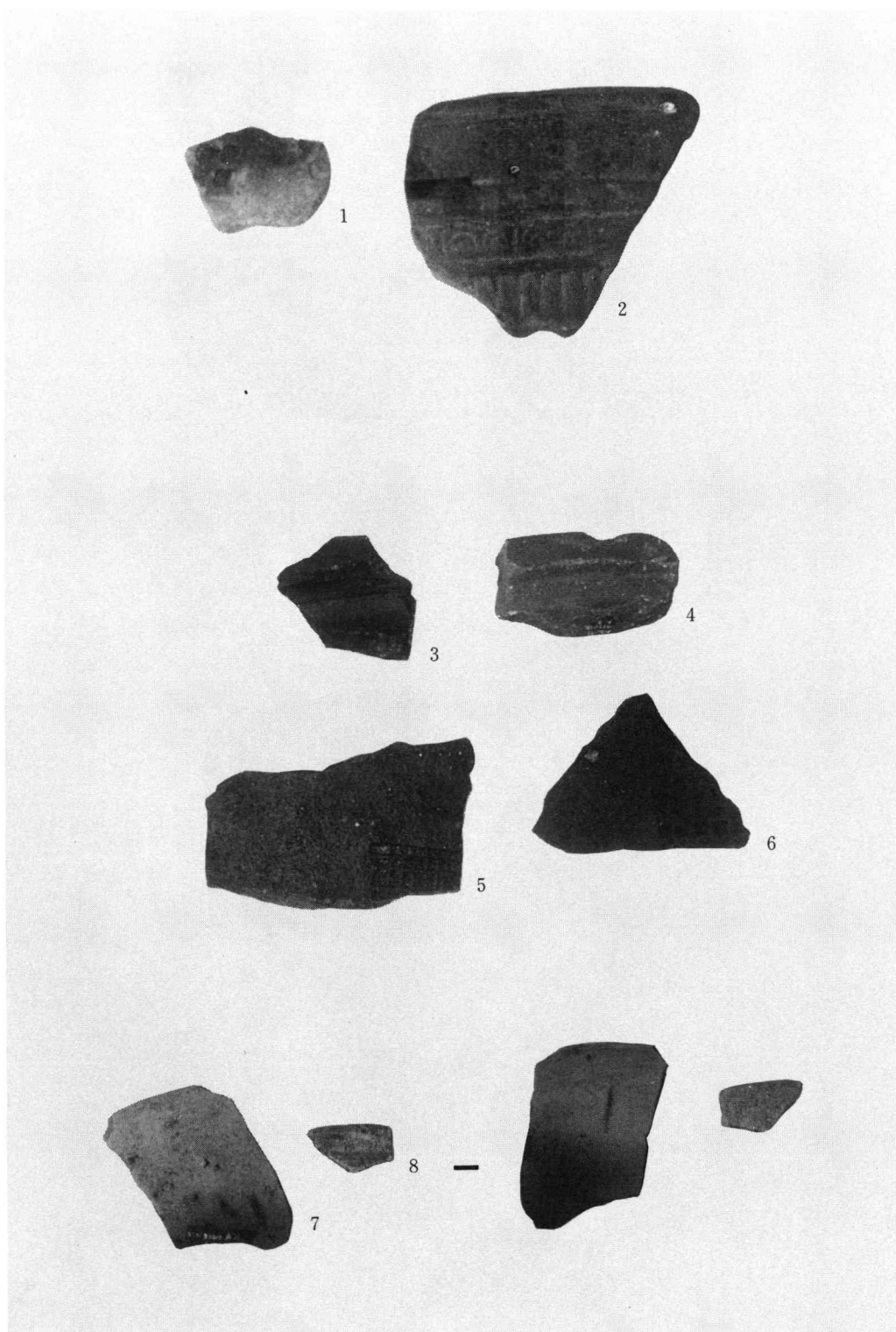


写真2 十三湊遺跡遺物写真(1)

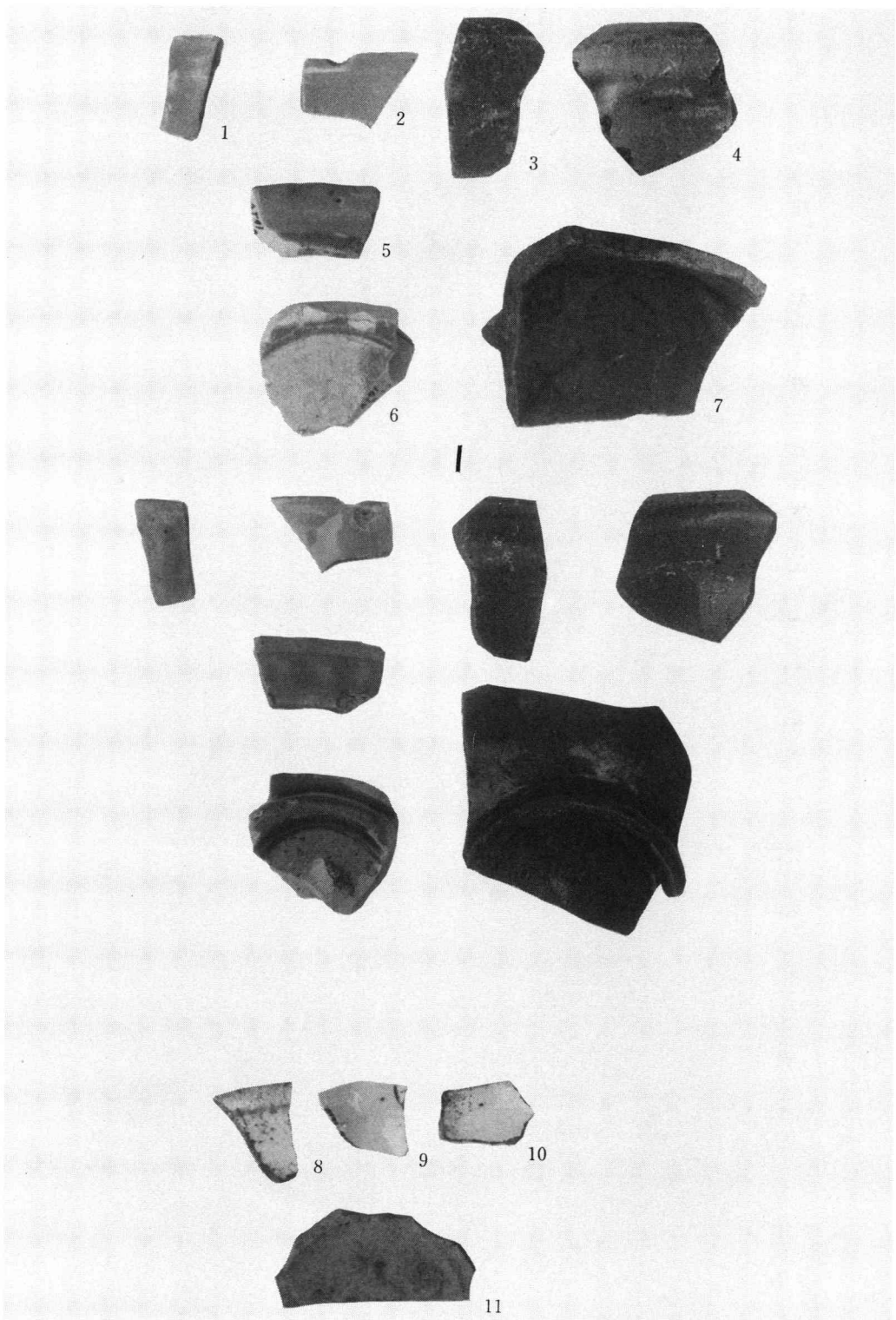


写真3 十三湊遺跡遺物写真(2)

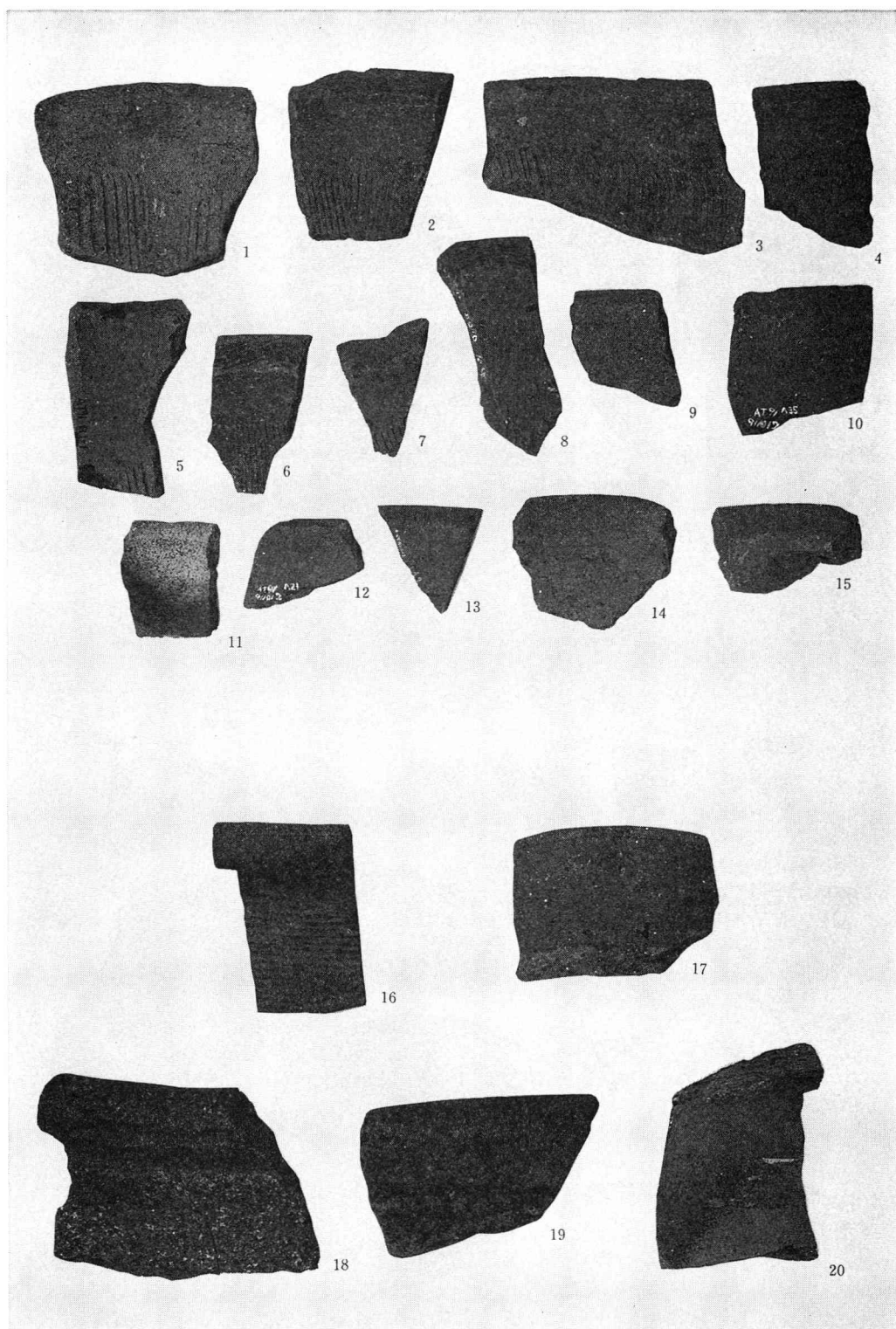


写真4 十三湊遺跡遺物写真(3)

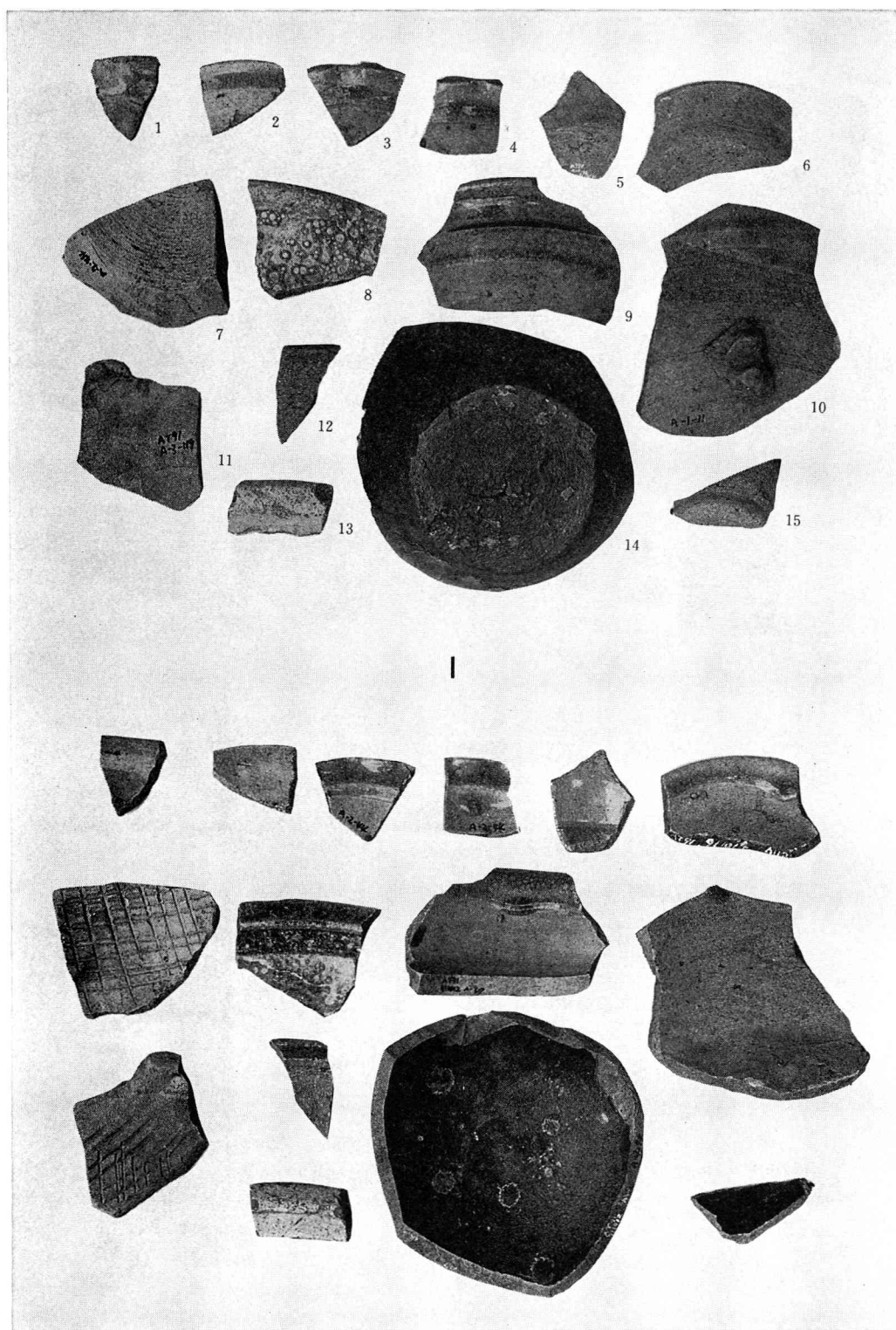


写真5 十三湊遺跡遺物写真(4)

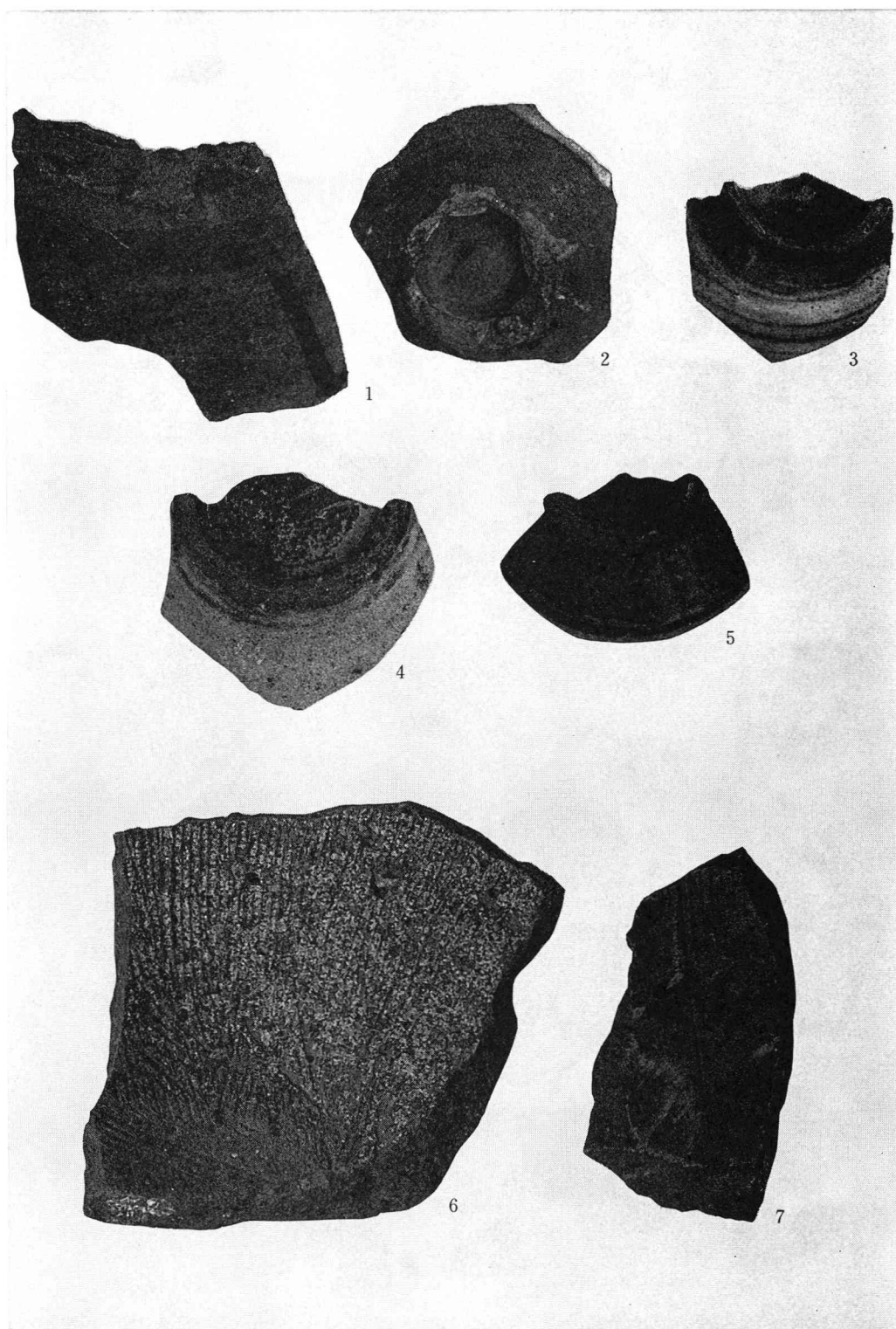


写真6 十三湊遺跡遺物写真(5)

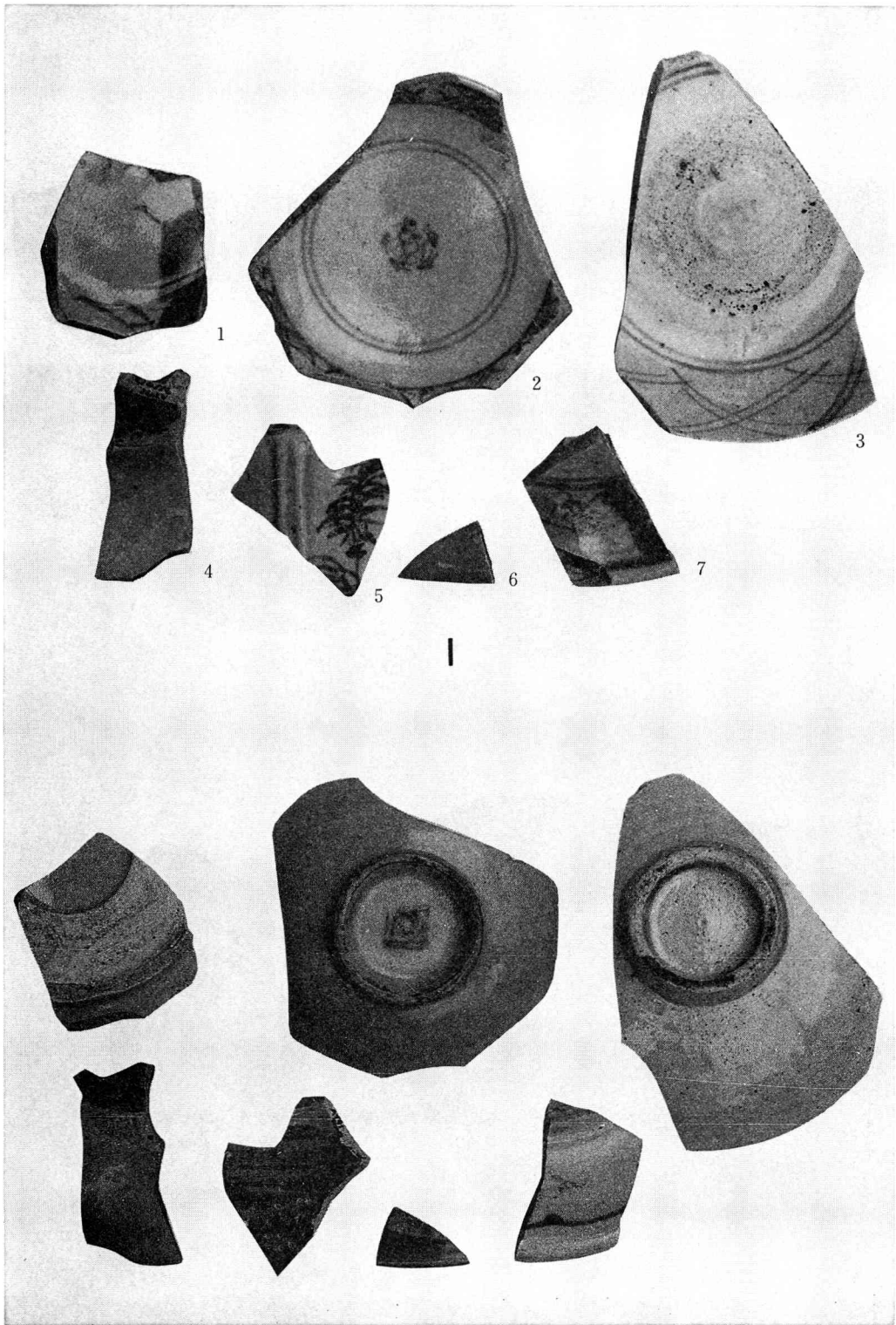


写真7 十三湊遺跡遺物写真(6)

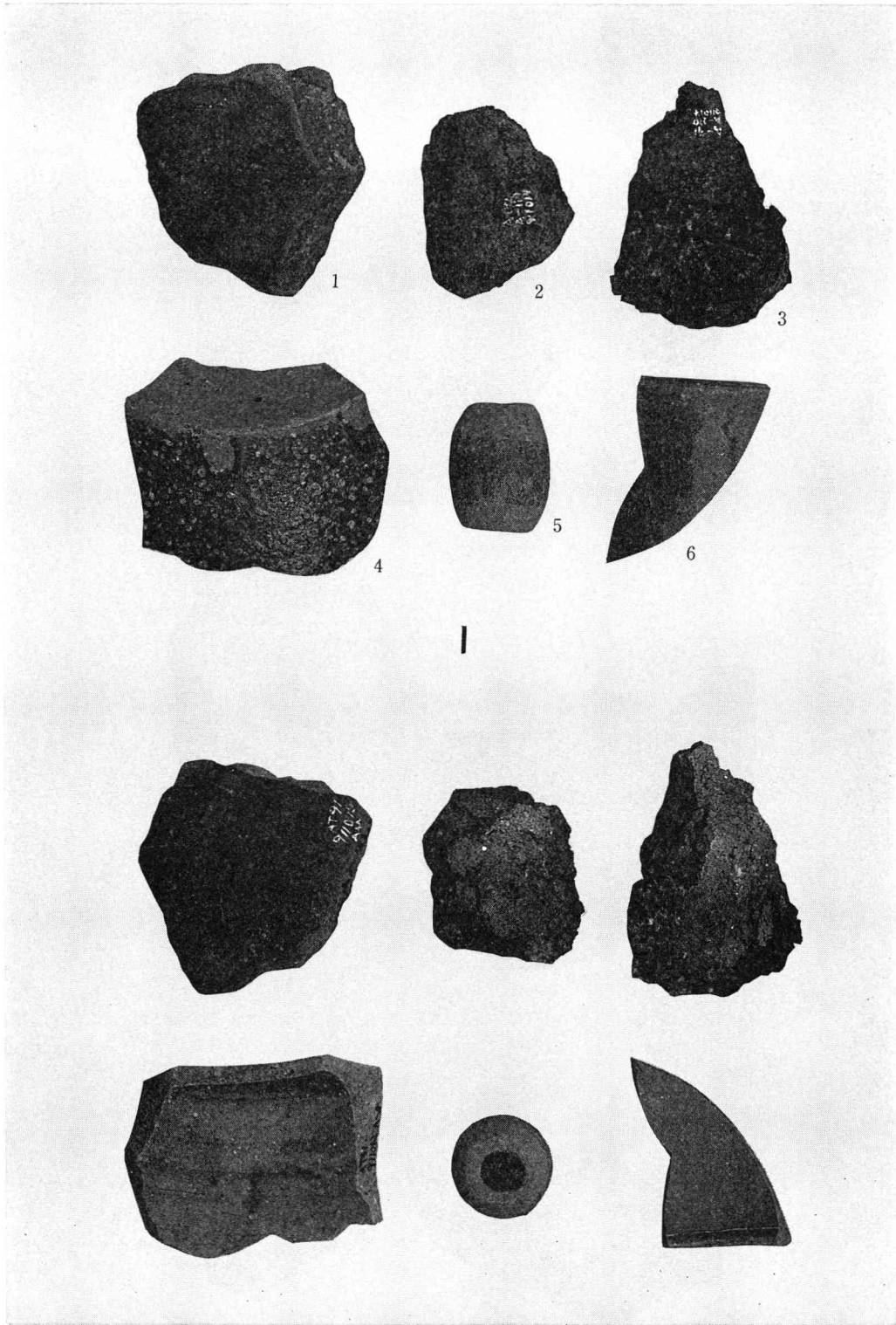


写真8 十三湊遺跡遺物写真(7)

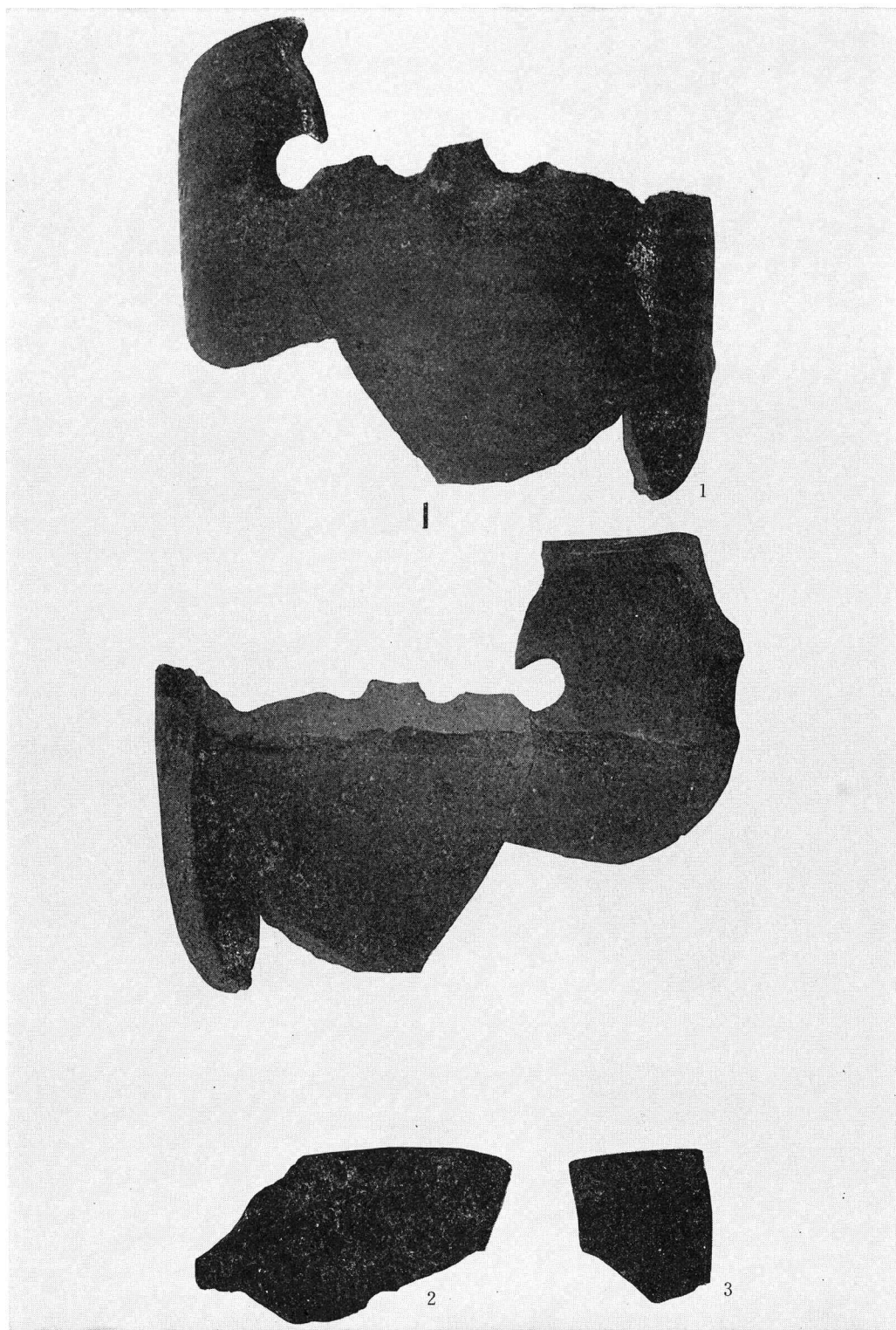


写真9 十三湊遺跡遺物写真(8)